

あとがき

55歳を過ぎたころから、漠然と定年退職後の生活を考えるようになった。

入社以来、仕事一途で走り続けて、ときには家族も犠牲にして働いてきたことに懺悔の気持ちもある。退職後はゆっくりと家族孝行をするか、と思っても具体的な事はなにひとつ出てこない。家族が望んでいる定年後の姿とはどんなものなのだろうか。せいぜい、足手まといにならないように生活することか、と寂しい思いが先に立つ。

祝福されて職を辞した次の日から、時間に悩まされるのではないかと不安がよぎる。

市民講座、資格取得、野菜作り…、空白の時間を埋めるようにいろいろなことに挑戦するが、それぞれに充実感はあるものの、夢がない。

「南極に行ってみたい!」という思いは、南極観測船「宗谷」が就航した頃から抱いていた。南極旅行を探してみると、旅行会社がツアーを募集しているが、たった一人で参加するのはためられた。そんな折にピースボートの地球一周船旅の広告を見つけた。地球一周の途中で南極クルーズも体験できるという。説明会に参加すると、会場には私よりも年上の人が多いことに驚き、安心する。

108日間の長旅に躊躇もあったが、女房は「行ってきたら」と気楽に言う。このひと言が私の背中を押した。

インド洋や大西洋、太平洋の海原、日の出、そして夕日、初めて訪れたアフリカや南アメリカ大陸の街、仕事で訪れた街も海から訪れるのは違った感動がある。

訪問地で見聞きした多くのことが心に焼き付いている。

船内生活も驚きと楽しみの連続であり、充実した日々を送ることができた。訪問国の人達とのふれあい交流はピースボートの特色である。私のクルーズ計画は観光優先で、この種の催しにはほとんど参加しなかったのは、心残りである。

船客は約900人、うち4割が20～30代の若者である。

アルバイトで資金を貯めて、休学あるいは休職して参加している若者の決断と行動力に感服する。これからの生き方に測り知れないインパクトを与える108日間であったことだろう。

我々老壮年には、これまで生きてきたことに対するご褒美のような船旅だが、出会った人それぞれに個性があり、金太郎飴のような会社付き合いとは異なった刺激ある体験をすることができた。

なにはともあれ、明るく元気な若者たち、歳を超えてアグレッシブに行動した同年代の人たち、皆さんありがとう。

本書を出版するにあたり、貴重な写真を提供していただいた船仲間の武内栄子さん、学生時代の山仲間であけび書房を経営する久保則之さんに大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

2010年1月11日 筆者 水野博之

南極観測船「しらせ」が昭和基地に接岸したニュースを聴きながら。